

入園テストをめぐる



日名子太郎

一、私の立場

入園テストをめぐる諸問題について書くように依頼されたのであるが、一口に幼稚園とはいっても、あまりに、その考え方が異なるため、園児をうけ入れる際の態度も千差万別であり、一率は論じ難い。例えば、優秀児を集めたいという方針の園においては、当然、そのような選択が必要となろうし、また園児が定員を割るほどに経営状態の悪い園では入園テストなどを考える余裕もないのが事実であろう。もちろん、各園の方針は、各園の自由であってよい。しかし、私は、入園テストを、あくまで、幼児教育の本来の目的から追究したい。

従来、ややもすると幼稚園は、一部の人々だけのものと考えら

れてきたが、最近では、ようやく、このような考え方もうすれて、大都市などでは、大半の幼児が就園するほどにまで大衆化してきた。しかし、現在のところ、未だ、すべての子どもが幼児教育をうけるといふ段階には至っていない。その理由として、一つには、

経済的なものもあげられるが、いま一つには、すべての子どもをうけ入れるだけの保育技術の不足も原因している。さらに、これに経営的な理由が結びつくとき、できるだけ、手のかからない、家庭のよい、いわゆるよい子の方を優先的に入園せしめようとする傾向も生れてくるのである。換言すれば、保育し易い、幼児教育をうける必要度から言うと、むしろ必要さの低い子どもの方が入園して、必要度の高い、手のかかる子どもの方が拒否されているというのは、全く憂うべき現象である。

すべての子どもに幼児教育をうけさせるということを目的として考えれば、入園テストは、全く不要なものである。もし、募集人員を上廻るほどの希望者があるならば、必要度の高いものから

入園させるべきであつて、必要度の低いものを選択して入園せしめるなどは、幼児教育の目的から考えて、全くナンセンスである。また、殆んど同質のものばかり集まっているのであるのならば、入園者数だけ選ぶためには、抽せんのみが最適といえる。

以上が、私の入園テストに対する根本的な立場である。

ここから、入園の際に、どのようなテストを行なうべきかという質問に対する解答が、自然に生れてくる。

二、入園テストの内容に対する私見

募集人員を上廻る応募者がある場合には、何らかの方法で、人数を制限せざるを得ない。

そのためには、

① 抽せん

② テスト といった二つの方法が考えられる。

第一の抽せんについては、説明を要しないが、第二のテストとしては、子どもに対する簡単な面接程度のものから、知能テストなどを含むいわゆるテストのようなものが含まれる。しかし、前節でも述べたように、必要度の高い子ども（集団生活を必要とするものなど）から優先的に入園させることを前提とすれば、テストとしては、面接や身体検査のみでじゅうぶんである。もちろん、面接に際して家庭環境などについては、事前に調

査用紙などを用いて記入しておいてもらうことが必要である。面接といつても、個人別面接のみでなく、集団もしくはグループごとのものも併用されてよい。何人かの子どもを一グループとしてそのあそびの状況を観察するものである。これによれば、運動機能なども併せ見られ、時間的にも短かくてすむ。

そして、このような面接の結果、

○ひとりっ子

○としよりっ子

○近所に同年齢の遊び友だちのいない子

○親が非教育的な場合

○親が教育意識過剰な場合

○子どもの生活が無視されている場合

○その他、問題のある子ども

などが、優先的に入園させられるべきである。

三、受験を対象としたテストについて

以上は、幼稚園が、入園希望者に対して行なう場合のテストのあり方についてふれたものであるが、次に、最近の有名小学校、有名幼稚園と称せられるところへの入学準備のためのテストについて述べよう。

今日、わが国における受験問題は、必要悪などということばで

よばれるほど、一つの社会的病理現象である。この現象は、幼児の世界にまで侵入して、多くの親は、有名小学校、有名幼稚園へ入学させようと焦る結果、どうしても、入試テストの準備ということが必要となり、誤ったテスト観を抱くに至っている。しかも、テストといえば、それは直ちに知能テストを意味するほど、知能偏重のものとなり、体力、運動能力、或いは社会性といった面が無視されすぎてしまっている。もつとも、ここ数年來、国立の小学校系統の入試では、総合的にテストしようという傾向が問題にも現われてきているのは、たいへん結構なことである。それに反して、私立の小学校系統では、かなり知能偏重の傾向がみられるのは、是非とも、改めてほしいと思う。これらの結果、一部の親は、知能テストを中心とする練習に相当の時間を家庭で費やすのみでなく、幼稚園などにまで、このような練習を強要するようなものも現われている。また、幼稚園の経営者・教師の中には、このような強要に屈して、テストの練習を行なうものや、むしろ卒先してこれを経営、宣伝の具として利用しているニセ保育者も少なくない。入試そのものは、仮りに必要であるとしても、それが幼稚園の教育へ与える悪影響は極めて大きい。

これを防ぐには、

①有名小学校・幼稚園では、入試の問題を再検討されて、是非とも知能偏重でない、全人格的な内容のものにしてほし

いこと。

②幼稚園が、確固とした教育理念のもとに親の誤まった考え方に対しては、これを啓蒙する熱意と教養をもってほしいこと。 などが必要である。

換言すると、幼児教育を正しく実施することによる幼児の心身の正常な発達、並びに学習効果の価値を認めるようなテストが行なわれれば、必然的に、知能偏重のテスト練習などは全く意味のないことが理解されてきて、保育もそのような方向へ向けられることとなる。今日、このような努力が為されていないとは言えないが、少なくとも、余り積極的であるとは言いがたい。

四、入園テストにハズれた子ども

テストが、定員過剰の人員をふるうためのものであれば、必然的に、テストにハズれた子どもが生じるわけである。テストにハズれたという失敗、失望感が、たとえ、前述のような幼児教育必要度の高い子どもを選ぶにしても、ハズれた子ども（幼児教育の必要度の低い、すぐれた子ども）に生ずることは否み得ないことである。これをなくすためには、抽せんによるほかはない。抽せんという方法では、たとえハズれても、自分への劣等感を生じない。しかし、そのようなテストの方法自体の問題も大事であるが、それよりも、親も教師も、いまま少し、子どもの心理、気持を大切

にしてやるのが大切である。親の中には、このような子どもの気持を全く考えない人が少なくない。自分の要求、虚栄心のおもむくままに子どもをかりたてている親を見るのは悲しいことである。それも、失敗してもよいという軽い気持で受験させたのなら、まだよいとして、まるで、一〇〇パーセント合格できるかのような錯覚を子どもにおこさせる言辞を弄して、その結果、ハズレてしまったというのでは親として、まったく子どもにすまないのではないかと思う。少なくとも幼稚園に関する限りは、誰でも、このような悲哀を、子どもに感じさせないように、全員入園できるようにしたい。

そのためには、全体の園のレベルが向上するとともに、一つの有名幼稚園（それも、何が原因で有名かということも分析する必要があるが……）へ殺到するといったことは止めて、幼児教育に適した園を選ぶことが第一に念頭におかれなければならない。遠距離を電車にのせて親が付添いで通園させ、しかも、その園が誤った教育をしているといった状態を見るにつけ、そのような親子をひとりでも少なくしたいものである。

× × ×
このように考えてくると、入園テストをめぐる問題は、結局のところ、親・教師の幼児教育に対する理解という点にしばられてくるのである。

まず、幼稚園側では、その使命を考えて、いやしくも、経営方針が、あまりに保育内容を左右することのないよう注意すべきである。とくに、幼稚園が、特殊小学校入学の予備校化しているのは、幼児教育への冒とくともいうべきであろう。かかる点をじゅうぶんに認識して、幼児教育を考えるならば、必然的に、入園者選考の方法も、それにふさわしいものとなるにちがいない。と同時に、幼稚園では、自己の園だけでなく、幼児教育全体の立場に立って、その方針を検討することを忘れてはならないであろう。次に、親の立場では、幼稚園教育の意義をじゅうぶんに考えて、何が望ましいものであるかの判断を誤まらないようにすべきである。

某研究所とよぶ団体が、広い会場を用いて行なうテスト料五〇〇円の模キテストを幼稚園によびかけて、その大会場が幼児で満員となる現状は、どう考えても正常とは考えられないものがある。これなどは、親、幼稚園両方の罪であるといつてよいし、また主催者にも大きな罪があるといえる。

どうか、幼稚園の教師諸姉が、真の幼児教育のあり方に立脚して、自分の園のあり方を考えて、その方向に進めるよう自分自身が積極的に行動してほしいと思う。

最後に、幼児教育における機会均等こそ、この問題解決の根本的な鍵であると思う。
（私立栄光幼稚園長、玉川大学助教）